世界遺産で地域経済底上げを／北海道・北東北の縄文遺跡群

昨年7月、青森県と北海道、岩手県、秋田県の17遺跡でつくる「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録された。各地の遺構や出土品から伝わってくるのは、およそ紀元前1万3千年から紀元前400年ごろまで、自然と調和しながら脈々と受け継がれた縄文の息づかい。現代社会に求められるサステナビリティー（持続可能性）の原点としても、国内外に広く発信できる素材だと期待している。

遺跡群の中で最もよく知られるのは、青森市にある国の特別史跡・三内丸山遺跡だろう。30年ほど前、県営球場の建設予定地で発掘が本格化したころ、撮影で日参しただけに多くの思い出がある。土器・石器、装身具や動物、魚の骨など、おびただしい数の出土品、さらに6本柱の「大型掘立柱建物」跡で見つかった直径約1mのクリ柱…。いずれも縄文人の豊かな創造性とダイナミックな活力が感じられた。

発掘調査が進み国内最大規模の縄文集落の姿が明らかになるにつれ、三内丸山は全国的な注目を集めるようになった。球場建設の中止、遺跡の保存が決まった1994年の現地説明会には1日に4,000人もの見学者が訪れた。「遺跡にこんなに人が来るのは見たことがない」ー。昨年11月、東奥日報社が青森市で開催したイベント『新聞記事で振り返る世界遺産登録への道のり』では、青森県世界文化遺産登録専門監の岡田康博さんが当時の縄文ブームを感慨深げに語った。

狩猟・採集や漁労といった縄文人の営みは、農耕・牧畜のように自然環境を大きく変えることがない。文字のない先史時代の文化遺産であるという縄文遺跡群の特徴と併せて、世界に通じる普遍的な価値としてアピールできるのではないだろうか。

新型コロナウイルスの感染拡大で、青森県の観光産業もまた停滞が続いている。悠久の眠りから覚め、再び脚光を浴びることになった縄文遺跡群と、その暮らしを支えた豊富な山海の幸を武器に、地域経済を底上げしていく方策を探りたい。

東奥日報社　広告局企画制作部長　畠山温光

現在の三内丸山遺跡。写真奥は景観に配慮した東北新幹線高架

保存のため覆土される前に遺跡を訪れた多くの見学者=1994年